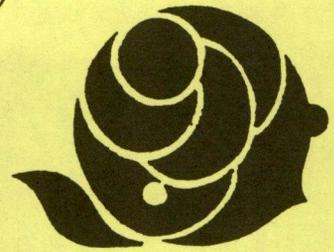


Rosa Pumula

ローザ・プルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレター No.19

目次

巻頭言	1
センター運営委員となって	1
13年度の社会及び自然の 分野開講本数減について	3
聞いてほしい私の意見 ー教養科目における 専門基礎科目の履修の意義ー	6
Vo i c e	
ー大学で育まれた友情ー	7
教養教育古今東西	8
掲示板コーナー	10

(平成13年1月発行)

21世紀に入った。20世紀の末（と言っても昨年か一昨年），数多くのグループがいろいろな視点から21世紀の社会について議論した。その結果，今世紀を予測する様々なキーワードが提唱されたが，それらの共通項を取ると，「情報化」「グローバル化」「少子高齢化」であった。これら三つのキーワードに象徴されるような社会を考えると，当然の帰結として，今世紀を「変化と多様性」の時代と位置づけることができよう。変化が速く，しかも多様性を許容する形で，過渡状態が連続する社会となることが想定される。



そんな社会を生き抜くには，変化を恐れる事なく，先見的に変化を読み取り，柔軟な対応で変化を好機とすることである。21世紀を澆刺と生きるために，心身の健康を保ち，知性と感性を豊かにしておこう。自分の能力を活かす多様な道があることを考え，広い視野と柔らかな発想で，可能性に挑戦しよう。私たち一人一人にとって，時の流れが，生きることの充実感に満ちるように祈っている。

(学長 宮田武雄)

センター運営委員となって

笹倉 貞夫（人文学部）

大学教育研究開発センターが発足して5年が過ぎようとしている。その時々々の執行部のイニシアティブと学部の協力のもとに，教養教育の運営は軌道に乗ったように見える。しかし，はたしてそうであろうか。センター発足は待たなしの試行錯誤的な見切り発車ではなかっただろうか。旧教養部のいい意味での遺産ははたして生かされているのであろうか。そもそも旧教養部体制，あれはいったい何だったのだろうか。

そのような思いが脳裏を掠めるなかで，教養教育は未曾有の試練に直面しようとしている。遺産は一定の条件のもとでは，それなりの価値はあるかもしれない

が，事態が激変するなかでは未来への指針を示しえないかもしれない。新しい状況のなかではつねに新しい判断が要求される。過去の遺産が未来への有効な指針を示しえないとするならば，未来への前進はやはり暗中模索の指標なき展開となり，ゼロからの出発を余儀なくされることになる。

かつて教養部は全学的無理解と兼担の一部引き上げのなかで悪戦苦闘してきた。学長は教養部解体のときにのみ最大限の理解を示された。かくして教養部責任体制は手際よく解体させられ，めでたく新体制が誕生した。その後，教養教育は，これまでのように教養部任せではなく，全学的な委員会を中心に責任部局制へと滞りなく移行し，教養科目担当についても完全な全

学出動体制をとることが改めて確認され、従って、担当形態における差別ないしは格差の構造化もなく、各学部の各教官は愚痴ひとつこぼさず嬉々として教養科目を担当し、4年一貫カリキュラムも少しの無理もな

く理想的なかたちで策定されるだけではなく、全教官が教養教育に大いなる関心をもち、真摯に教養教育に取り組んでいる姿は実に感動的である。せめてそんなふうを考えてみたい。

一教養教育に対する教育学部の取り組み一

小野寺 淳 (教育学部)

教育学部は「地域における大学の使命を自覚し、人間形成に関わる専門の学芸の総合的な教育と研究によって、生涯学習社会における教員の養成及び現職教育に努め、併せて広く教育文化を進展させる人材を育成すること」を目的としている。この学部の教育理念のなかで、教育学部においても教養教育の果たす役割はきわめて大きい。

そこで、新たな教養教育がスタートした翌平成9年度から「教育学部教養教育協議委員会」をいち早く発足させ、大学教育研究開発センターとの連携のもと、4年一貫教育における教養教育の充実を推進してきた。メンバーは、教務委員長、点検・評価委員長、学部将

来構想委員長、教務委員会選出委員、センター併任教官、責任部局併任教官(健康・スポーツ科目)、責任部局併任教官(総合科目)、専門部会の各委員(外国語、健康・スポーツ、情報関連、人文、社会、自然、総合)の14名であり、学部あげでの協力体制が整っている。この委員会では、教養科目のカリキュラム編成を中心に、点検・評価及び新しい授業科目の開発と授業改善など、教務委員会との連携のもとで教養教育全般をつねに検討しつつ改良を加えてきた。

しかし、これから教養教育の4年一貫カリキュラムの点検・評価に加え、授業のあり方に関する中間答申、履修申告単位数の上限設定などを受け、教養教育の再検討が予定されている。センター併任教官として、全学的視野から、より充実した教養教育の達成のために微力ながら力を尽くしていきたいと思う。

一教養とは一

小柳 武和 (工学部)

つい先日、NHK教育TVで、『教育・21世紀の人間創造へ』と題したシンポジウムが放映された。そのなかで、パネリストの多くが「教育の目標は、人間として、社会人として、また地球人として共に生きるための素養を養うことにある。自己を確認し、どう生きるべきかを考え、社会において意志の疎通を図る力を養うことが大切である。」といった趣旨の意見を述べていた。それは、まさに教養教育の目標そのものと思われる。

2年前前、私は文部省長期在外研究員として、イタリアに出張する機会に恵まれた。いま、その時知り合ったイタリア人のことを思いだしている。エンジニアとして企業に勤め、定年退職後はワインの売り込みや料理指導に来日するなど趣味(教養?)を生かして悠々自適の生活をしている彼は、多くのイタリア人がそうであるように、ヴェネチア出身であることを(日本

人から見ると)異常なほど誇りにしていた。ワインでほろ酔い気分になった彼は、イタリアの歴史から始まり、歴史的にも文化的にもヴェネチアが如何に重要な都市であり、ヴェネチア人が如何に優秀であるかを流暢な英語で延々と話し続ける。語学力の乏しい私さえ納得させてしまう話術と知識の豊富さに驚き、彼の教養の深さに感服してしまう。そのうち、髭面の彼の顔に気品が漂ってくるのを感じるのである。そのためか、彼の料理教室は奥様に大人気とのことであった。

自国の歴史や文化への深い造詣と誇りは、他民族と張り合って生きることを余儀なくされた西欧人の欠くべからざる素養(教養)であったとも考えられるが、彼は現在、ワインとイタリア料理の知識だけでなく、イタリアやヴェネチアの歴史・文化への深い造詣を、人生を楽しく生きるための力にしている。現在の彼にとっては、ワインや料理の知識が専門知識であり、その関連知識としての歴史・文化への造詣であって、大学で得たエンジニア専門知識はいわば博識の一部となっているに違いない。

教養の定義づけは難しいが、価値観が多様化し、グローバル化する21世紀の成熟社会で柔軟にかつ楽しく

生きていく力、そこに教養の本質があると思っている。

13年度の社会及び自然の分野開講本数減について

外国語科目専門部会長

青木 研二

10月5日のセンター運営委員会で、各学部の4年一貫カリキュラムの資料が配付された。それを読んで、社会及び自然の分野における、教養科目の専門基礎科目への移動は、単に理学部、人文学部社会科学科所属の学生の教育の充実・強化を狙いとしたものではないという印象をもった。つまり、現在とめどなく進行している大学大衆化の状況の下で、学生の基礎的学力や素養の不足、問題意識の欠如や進むべきコースの不明瞭性などに対するケアの必要性が痛感されているように見受けられるのである。そこには危機意識的なものが多分に含まれているであろう。このように、理学部、社会科学科の考え方はそれとして理解できる。しかし、センター運営委員会でも指摘されたように、社会及び自然の分野の本数減によって、分野別科目及び総合科目のクラスサイズの拡大が懸念されている。学生へのサービスということを念頭に置くなら、問題が生じた場合、担当体制をもとに戻すのではなく、教員の負担増を覚悟して教養科目の本数を増やす、あるいは教養科目のメニュー構成を全体的に見直すといった対策を

とることも考えられる。もちろんその際は、分野別科目・総合科目だけでなく外国語科目も含めた他の教養科目も視野に入れた形で再検討を行うべきであろう。

社会及び自然の分野開講本数減に関しては、もうひとつの重要な問題がある。誰でも思い当たるのは、4年一貫カリキュラムをおし進めて行くと、各学部バラバラの単科大学的な状況に行き着いてしまい、総合大学や大学部・大講座的な大学の構想と相容れなくなってしまうのではないかということである。自分の学部・学科の学生を主なる対象とすることで、他学部・他学科の学生にもわかりやすい授業を実施しようとするサービス精神が弱まっていくのではないかという心配がある。現代の社会では、情報の氾濫、環境問題、先端医療技術など複雑で容易には判断を下しにくい問題が多数存在している。学生にそうした問題の所在を伝え、彼らの意識を触発して行くことに、教養教育の重要な意義のひとつがあるといつてよいであろう。したがって、各専門領域の〈横断性〉、社会的、自然的事象に関わる〈複合性〉、題材の〈現実性(リアリティ)〉などを大学において確保するためには、やはり開かれた教養教育の場を出来るだけ充実し維持し続けることが重要なのではないかとと思われる。

情報関連科目専門部会長

奈良 宏一

—社会及び自然の分野開講本数減について—

平成13年度から社会及び自然分野の教養開講科目数が減少する。この件に関して専門部会の意見を述べよという要望であるが、専門部会として意見をまとめるべき問題ではないので、以下は筆者の個人的な見解である。開講本数減少の理由は、人文学部と理学部の社会と自然の対応する科目が専門基礎科目に移ったからということである。よって、実質は何も変わらないという議論があるが、はたしてそうであろうか？

同じような内容の講義でも、教養科目と専門科目とでは、講義の視点が自ら異なるはずである。講義を聞く者も、複数の異なる視点からの講義を聞くことでより理解を深めることができる。独創的な発想は広い視点で物事を見て、初めて可能である。大学を卒業し、自分の専門分野で日本や世界をリードするためには専門分野の知識ばかりでなく、広い視野の知識が役に立つ。教養科目は、この広い視野を養うものであり、かつ、良識ある社会人として周囲をリードできる力を養う一助となるものである。このような観点からすれば、安易に、専門基礎科目に同じ内容の科目があるからといって教養科目を切り捨て得るものではないように

思われる。4年一貫カリキュラム改訂の議論の中で、学生が幅広い視野で勉強可能なように、また、バランスのとれた教養科目を選択可能なように議論を尽くすべきである。今回はこのような議論を始める直前の開講科目数の減少である。

さらに、現在の本学の教養教育態勢は各学部の教養

開講科目数の微妙なバランスの上にあることも考え合わせる必要がある。このバランスを崩して大学教育研究開発センター方式の崩壊をさそい、大学改革を一挙に推進しようとする遠謀深慮であれば考慮の余地もあるが、それも無いようである。人文学部と理学部の今回の行動はあまりにも拙速ではなからうか。

人文科目専門部会長 杉井和子

今回問題となった開講本数の削減について、専門部会とセンターの主張が平行線を辿ったのは、双方の主張にそれなりの根拠があったからと思われる。人文部会の利害で言えば、来年度はともかく二年後には哲学や心理学など人気の高い科目がまた人数増になるかということも懸念される。ともあれ、この決定が固定的なものではなく事態によって改変されることが約束されているので、ひとまず見守りたい。

さて、ここでは二つの点に絞ってこの問題を扱えよう。まず第一は〈負担〉をどう考えるか、第二に〈教養教育〉の本来的なあり方である。

社会の専門部会から提出された案の発端の一つはクラスサイズのことであろう。人文系では200人を越える

科目があるが、半数にすれば本数のうえで負担が増える。一方で10人程度の科目もあり、哲学や心理学と併行して他の科目を置いても焼石に水で事態は変わらない。生徒の受講希望という面から考えると一層複雑になる。今回、専ら本数にこだわって論議してきたが、それに対する見直しもあってよいのではないか。

次は、専門性と教養についての基本的な問い直しである。専門教育に偏りがちになるのを、どうく教養教育という面で巻き返すのか、その討論はもっとなされるべきである。個人のささやかな経験をもとにして述べるのは聊か抵抗もあるが、工農の学生を対象とした今年の小説読解の授業で、文系の学生よりもはるかに秀れた観察眼に触れて、いたく感激した。逆もまた真であろう。専門性とは、同時に拡大する知性の営みであることを期待しながらこの問題にさらに取り組んでみたい。

分野別科目の履修方法が変わります

— 来年度以降、人文学部社会科学科
入学生が対象 —

社会科目専門部会長 斉藤典生

周知のことでしょうが、教養科目は大きく共通基礎科目と主題別科目の二つから構成され、その主題別科目の中には、人文、社会、自然の3分野から成る分野別科目が含まれています。従来は、これら3分野それぞれ4単位ずつ、計12単位の履修が義務付けられていましたが、このたび平成13年度以降に入学する人文学部社会科学科の学生については、その履修方法が変わることになりました。今回の変更措置について、簡単にご説明しておきましょう。

大学改革に基づく新しい教養教育がスタートして以

来、望ましい教養教育を目指して絶えざる努力が続けられていますが、今回の措置もその一環に位置しています。社会科学科の学生は、一方で社会分野の科目を履修し、他方で専門科目を履修するというのが従来の形でしたが、この両者の間にはどうしても内容的な重複ができてしまいます。そこでこの重複を解消し、同時に専門基礎科目を充実させて1年次生の時から体系的な専門教育を展開しよう、これが今回の履修方法変更措置のねらいです。

具体的には、分野別科目については人文および自然の2分野から各々4単位ずつ、計8単位を必要最低修得単位とする、卒業に必要な教養科目修得総単位数を従来の38単位から30単位に減らす、どのような形のものであれ社会分野の科目を修得してもその単位は卒業要件としての上記30単位には算入しない、等が変更の内容です。

社会科学科以外の他学部、他学科の学生にとっても、この措置により社会分野の授業内容がより充実すると

いったメリットが得られるものと思います。

自然科目専門部会長 堀内利郎

「理学部学生対象であった自然科目が教養科目から姿を消し、自然科目の開講本数が減少することについて」

いよいよ新世紀に入り、理学部の4年一貫新カリキュラムが4月よりスタートします。私たちは、教養教育は「自立した市民」としての知識や素養の育成、生涯を通じて学問をすることの動機・意義付けを目的とするべきであると考えてきました。一方、専門基礎教育は一貫教育として、それぞれの学部学生に最適の形で、当該学部専門科目として行うべきであると考えています。この理念が理学部4年一貫新カリキュラムにおいていよいよ実現するわけです。この結果、理学部学生対象であった自然科目が教養科目から姿を消し、開講本数が見かけ上減少しますが何も心配する必要はありません。理学部専門科目として、より充実・多様化生まれ変わったのですから。

さて、これは茨城大学にとりどのような意味を持つのでしょうか？

教養部改組以降、ながらく理学部の専門基礎教育は

教養科目の中の自然と理学部・専攻科目の基礎的部分の2本立てでありました。これは、全国的な教養部の廃止という急激な変化を緩和するための経過措置であり、大学としてなるべく早く解決が望まれていた問題でした。それが今回の措置により、7年の歳月を経て1つのカリキュラムに統一されることになったわけです。これにより理学部だけでなく大学全体として得られるメリットは計り知れませんが、その一端を述べてみましょう。

1. 自然科目に関して専門教育と教養教育の理念が明確になる。その結果、専門教育の一貫性が完全に確立され、同時に教養教育の本質的な充実が可能となる。
2. 自然科目以外の科目を理学部学生の教養科目として位置づけることにより、自然科目の履修に偏りがちであった点が解消され、真の意味の教養教育がなされることになる。

茨城大学のようにキャンパスが分離している大学にとっては、各学部がいかにして4年一貫教育を実現するかが最も重要な問題であり、この意味において今回の改革は茨城大学にとって重要な第一歩となることを確信しています。

「教養教育」の行き先は？

総合科目専門部会長 曾我日出夫

平成13年度から、社会及び自然の分野の開講本数が減ることになります。これについての審議で問題になったことの一つは、教養教育の軽視になっていかないかということでした。それに対して、関係学部・専門部会から一応、本数減の余力を導入的な教育の充実に振り向けるのだなど、軽視にはならないとの説明がありました。その説明は、うなずける点も少なくはなかったのですが、私にはもう少し議論すべきことが残っ

ているような気がします。すなわち、「この先茨城大学の教養教育をどのようなものにしていくのか」の議論をもっとするべきではないかと感じるのです。

例えば、解釈によっては、専門の導入的な教育は教養教育の一部と考えられなくはないですし、そうでないとしても、各学部が専門の導入教育をすべて閉じた形で行うのがいいのかどうか疑問な気がします。大学教育研究開発センターがこの導入教育に係わってもいいのではないのでしょうか。また、教養教育に、今までの概念とは全く違う内容を取り入れていくことも可能なのではないのでしょうか。その流れによっては、教養科目の区分や各区分の内容も変わるかもしれません。

いずれにしても、「教養教育」や「導入教育」を各学部の垣根を外して検討したり、「開発センター」が中心になってそれらを実施したりしてもいいのではないかと考えています。もちろん、今回のことでこのよう

な検討や実施が否定された訳ではありません。今後継続して教養教育について検討していくことになっていきますので、これからの審議に期待しているところです。

聞いて欲しい私の意見 - 教養科目における専門基礎科目の履修の意義 -

西尾 博志 (理学部1年)

教養科目というのは、大学生としての一般的な知識を理解するためだというふうに私は考えている。その教養科目に専門基礎科目を取り入れるということについてだが私は、とりわけ問題はないと思う。

教養科目を選ぶ選択権は我々学生にあるのだから、興味のある講義を学生が履修し、半期の講義ではあるがそこで自分自身が得たものを今後の専門科目を履修、研究するに当たって活用すればいい事だし、または、将来何らかの職についたときにもしかしたら教養科目で学んだ専門基礎科目というのが何らかの形で使えるかもしれない。どちらにせよ、自分の知識を増やすという意味では何ら問題はないのではないのでしょうか？

私は、現在理学部の数理科学科に在籍している。私が現在、履修している教養科目の中に数学というのがある。私は、数理なのでどちらかというと数学に関しては他の学部の人よりは出来るという風に自負している。専門科目でも数学の授業はたくさんやっている。その私が、教養科目で数学を履修するのはやはり、始めは少し抵抗感があった。「教養の数学だからな～多分基礎的な部分で終わってしまうだろう～」履修前は、

私の頭の中にそのような思いがあった。ところが、いざ授業をやってみるとその授業が面白い、面白い。いつも我々が専門でやっている数学に似ているのだが、別の視点から数学というのを見ているのでとても興味深く現在学習している。もっと勉強していろんな知識を身につけたいという意欲が現在沸いている所である。

だから始めにも述べたように、別に教養科目において専門基礎科目を学ぶ事に関してはとりわけ問題はないと私は考えている。それよりも大事なものは、専門科目にしる教養科目にしるその講義で自分が得たものは何なのか？自分の今後の参考になったのか？これが大事だと思う。

確かに、教養科目で専門基礎科目を履修する事に関して抵抗感というのもある人もいるかもしれない。ただ、大事なものは教養科目にしる専門科目にしるきちんと目的を持って講義を受ける事。そうすればそこでまた、何か新しい発見があるかもしれないし、自分の為にもなる。大事なものは、生徒1人1人の講義に対する関心・意欲・態度ではないかと私は考える。

また、それと同時に教授のほうも生徒たちに興味を持たせるようなきちんとした講義を実践して欲しい。

佐藤 裕美 (工学部4年)

今回、専門基礎科目の履修の意義について作文を書くことになった。これまで、私は何を学び、何を得てきたのだろう。普段、あまり考えなかったことを振り返り、そのころを思い出してみた。

しかし、単位を取得し、学んだはずのことを、実際はあまり覚えていなかった。これは、記憶力にあまり自信のない私だからなのか？それとも、普段使っていない事だからか？きっと、また必要なときに、教科書

やノートを見れば思い出せるものだと信じたい。

そんな私でも、もちろん覚えていることもある。今、卒業研究を行うにあたって、プログラミングもしている。プログラミングに関して、私は授業のことも覚えているし、あのころ学んだ知識は、今とても役に立っていると思う。私はその授業を受けたことで、その分野に興味を持ち、そして卒業後、ソフト会社に就職予定である。きっと、人によって、覚えていることと記憶が曖昧なことは違っているだろう。だから、専門基礎科目の何が必要で何が必要でないかということまで

はわからない。

ところで、毎日、卒業研究に取り組んでいるわけだが、実は自分の希望する研究室には入れなかった。それはあまりにも安易だと思える、くじで決まってしまった。くじ運がない私は、やはりはずれてしまったのである。卒業研究は1年から学んできたことの総まとめとしての研究であり、まさに、学んできた専門基礎科目を生かす場ではないのか。それをくじで決めてしまう事に、疑問が残った。私がそんなふうに、納得がいかないでいることに、学費を払い、学ぶ場を与えて

くれた両親にも申し訳ないと感じている。今後、そう考える人がいなくなるように、もう少し改善してもらいたいと思う。

大学は何か興味のあることをより深く学び、研究する場であると私は思っている。私がプログラミングに興味を持ったのと同じように、人それぞれ、いろいろな分野に興味を持つことだろう。そのきっかけの一つが専門基礎科目であり、研究や将来に生かす事が履修の意義であると私は考える。

寺下 麻美 (農学部3年)

「難しすぎてわからなかった。」

今回この原稿を書くに当たって、専門基礎科目の感想を同級生の友人たちに聞いてみたところ、一番多く返ってきた答えがこれでした。

私たち農学部の学生は専門基礎科目を1年次に水戸で履修します。その講義の内容は、農学部の先生方が1時限ずつ、それぞれに研究されている専門分野についてお話しになるというものだったと思います。

この専門基礎科目の講義で配られたプリントや資料を今、読み返してみると、先生方の個性や研究テーマがコンパクトにまとめられていて、3年次に行われる卒論研究室選びの大変良い参考になりました。

しかし、1年生の頃を思い出してみると、まず、毎週違う先生、毎週違うテーマという講義形態で戸惑っていたように思います。そして、全く内容の理解でき

ない、まるで知らない国の言葉を聞いているように感じるものも、いくつかありました。1年生には、内容が専門的すぎたと言えるのではないのでしょうか。

一方で、1年生の頃から「無機化学」「有機化学」「物理化学」などの専門の中でも化学の基礎と言えるような分野をやっておきたかったという声も聞かれました。

また、この専門基礎科目の講義を通して、農学部の先生や同級生の顔を覚えることが出来て良かったという声も聞かれます。

大学受験の際に農学部を選んだ理由は人それぞれだと思いますが、多かれ少なかれ、そのイメージと現実にはギャップがあったのではないのでしょうか。

阿見から離れた水戸の地で、自分がこれから学ぼうとする専門分野の実際の姿を知る。

専門基礎科目が、そういった「学問の入口」という役目を十分に果たすものであって欲しいと思います。

Voice —大学で育まれた友情—

大学生活と友達

井原みのり (人文学部2年)

私は地元の高校から茨大へと進学した。そのため、入学当初からキャンパスには小中学校・高校の時から知りあいや友達の顔がかなりあり、おかげで孤独感とは無縁で大学生活をスタートさせることができた。

一方で、大学で新たな出会いも数多くあり、そのうちの何人かとは友達づきあいをしている。学科の新入

生オリエンテーションで偶然近くの席だった同級生と話が合い、昼食を一緒に食べたり授業の話や世間話をしたり、時には遊びに行ったり飲んだりする仲間になってしまうのだから、出会いとは不思議なものだ。

思えば大学入学したての頃、私は自分の周りに突如として広がった世界を、一気に自分のものにしようと焦っていた。人間関係、新しいシステムの授業・サークル・バイト・自由に使える時間……。思うように事が運ばずイライラする私を、いつも温かく見守

ってくれたのは友人達だった。友人達が私を支え、成長させてくれたのだ。

人付き合いの楽しさと難しさは、私が大学に入って学んだことの一つである。自分は相手に甘えて身勝手な態度や押しつけがましい行動をとっていないだろう

か、相手の気持ちを考えることができているだろうか。客観的になって振り返ってみるのも大切であると学んだ。

最後に昔からの、そして大学でできた新たな友に言いたい。今までありがとう、これからもよろしく。

「黒 一 点」

寛張 茂樹（教育学部2年）

僕が在籍している養護学校コースの2年次には、クラスに21人いて男が1人しかいません。「黒一点」とでもいうべきでしょうか、授業では本当にそんな感じています。「大変だね」とまわりは言うけど（男子学生は「羨まし〜い」ですが）、今ではあまり大変だとは思っていません。僕自身、すっかりと溶け込んで、周りが全て女の子でいることに違和感や緊張感を感じません。

入学当初はとにかく不安でした。これから男1人でやっていけるのか、友達はあるのか、そんなことばかり考えていました。サークルに入っては辞めてを繰り返す、当時は本当に右往左往して悩んでいました。そんな僕に、彼女達は気兼ねなく話しかけてきてくれ

ました。溶け込みすぎて、男性としては全く見られてはいない様子。男としてちょっと寂しい気もしますが…。そんな彼女達だったからこそ、今、何不自由なく大学生活を送れているんだと思います。

思えばいろんな人が励し、支えてくれました。担任の先生は「先生が友達になってやる」と早くから言ってくださったし、最初に男友達となってくれた人も今では公私に渡って大親友です。彼女達が僕を受け入れてくれたことも僕にはとても大きな励しとなっています。

ある学科の飲み会の話。先生に「男1人で大変だな」と聞かれた僕は自然と「そんなことないです。大切な仲間です」と答えました。

これからも男女を越えた「仲間」であって下さい。よろしくをお願いします。

教養教育古今東西 — 教養教育FD研修会

F D研修会の「持続的発展」のために

佐藤 恵一（人文学部）

秋の学期が始まって間もない頃のことである。共通教育棟での授業に向かう途中で、教室を移動中の学生諸君の集団のなかに巻き込まれてしまった。聞くとはなしに学生諸君の会話が耳に飛び込んできた。「あの先生は、自分の授業には出なくていい、と言っている。試験も授業に関係ないところから出す、と言っている。なので、あの授業には出ないことにした。だから、今日はもう帰る。」というような内容だった。

この会話は、その後も気にかかるものだった。一体「あの先生」はどのようなお考えがあって「出なくていい」と語ったのだろうか。自学自習の重要性を伝えるつもりだったのかも知れない。しかし、学生はそのようには受けとめていない。教官の意図と学生の受け

とめ方の間にはズレが存在しているように感じられ、改めてFDの存在とその機能を思い起した。

われわれ教官は「消化試合」をこなすようなつもりで授業に臨んでいるのではない。個人差はあれ、それなりに工夫を凝らしている。学生諸君にはなじみの薄いことかも知れないが、最近、教官はFD研修会なるものに参加して、教育のあり方についての論議を深めている。FD (Faculty Development) とは、大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」の用語解説によれば、「教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取組の総称」とされており、具体的な例として授業方法についての研究会の開催などが挙げられている。先日、学会の折にお会いした九州地方の某国立大学の学部長からは、自らが講師となって学部単位でのFD研修会を開催した、との話を伺った。FDはすでに全国の大学に普及・定着し

たようである。

本学のFDも、1998年から毎年開催されている。私も昨年度の研修会に参加し、いろいろ感じる場所があった。参加する教官の範囲、テーマの選定（長期的・持続的に検討すべきものと短期的・緊急に対応すべきものの仕分）、開催時期と場所などに工夫の余地

がある。全学的規模で組織し、議論の活性化と継続を期待するならば、人文・社会系学生に対する自然分野の授業、自然系学生に対する人文・社会分野の授業のあり方などを検討することが糸口となるのではないかと考えた。文系の知、理系の知の問題は、奥行きが深いテーマであり続けるからである。

教養教育FD研修会に出席して

神子 直之（都市システム工学科）

京大でノーベル賞が出るのに東大ではなぜ出ないか、それは全学の教官が出入りする食堂が東大にはないからだ、と随分昔に読んだことがある。その後東大でも本郷キャンパスの中心に山上会館が整備されたが、果たしてそれが格好の交流の場となったのかどうか。3キャンパスに分かれるわれらの場合は、ノーベル賞を望むべくもないのか。

学部で教務委員を仰せつかったおかげで、工学部キャンパスのある日立市内のホテルで宿泊付きで行われるFD研修会なるものに参加することになった。年度末の時期に居室にいてこなさねばならない業務は手に余るほどある。参加は気が進まない、というのが正直な感触であった。しかし、会場に赴くと、毎年年度末に謝恩会が行われる広間に、聴講テーブルと演台が設けられていて、気分は半ばしっかり研修を受けて帰ろうという心意気になる。

ほどなく分科会に分かれると、各学部からの出席者の自己紹介と、それぞれの立場からの意見交換になった。同じはずの教養教育に関して議論する中でさえ、異分野の教官と言葉が通じない、という思いを一瞬抱いた。普段自分がどれだけ限られた語彙の世界にいたかがわかった。懇親会を経て翌日の討論になると、大分お互いの意見を理解することができるようになり、まとめ役の手際良さもあって一応の終結をみた。

冒頭に書いたように研究の推進に異分野との交流が資するのだとすれば、教養教育という共通の話題で議論することになるFD研修会のような全学の会議は非常に良いきっかけとなる。総合大学である利点が結晶する機会でもあり、継続・拡大して開催してもらいたい。今回の場においても、同世代の異分野の教官とネットワークを形成することができ、これから互いの教育・研究に相互協力をしていくこととなった。私はノーベル賞を目指すつもりは無いが、阿見でも水戸でも宿泊付きで行われる、というのであれば、自腹を切っただけでも(?)また参加するつもりである。

軽部重太郎（農学部地域環境科学科）

「教養教育の問題点や他学部の雰囲気がある程度知ることができた。いろいろと考えさせられて、久しぶりに充実した時間だった。参加して良かった。」というのが、2000年3月の第2回FD研修会に出た後の感想である。

教養教育は、高校までの教育および専門教育の進め方に密接に関係し、大学教育の中で極めて重要な位置を占める。多くの教官は現状で良いとは考えていない。しかし、各学部や各地区にはそれぞれ様々な事情があるので、我々は置かれた条件の中で最善の方策を模索するしかない。そんな中で、1泊2日のしっかりと計画された研修会をもち、それに全学の教官が参加して

自由に問題点を討論することは、これからの茨城大学の教育を良くするために必要なことと思う。

FD研修会の良いところは、教育問題の討論に2日間集中できることである。昨年度は、設定されたいくつかの課題について分科会で集中的に討論した。これは良かったと思う。夜はゆっくり休んで、次の日に朝早くから討論を続けたことも良かった。それによってけじめのある研修会になった。研修会を開く上で重要なことは内容を充実させることであり、そのための準備を主催者が中心となってしっかりとすることであろう。できれば夏休み頃に、前回のような快適な会場を使ってするのがいい。

次年度からは「FD研究会」という名称で実施したいというまとめが最後にあった。茨城大学の教育につ

いて主体的に研究交流する場にしようという趣旨と理解した。自主的な発表や討論をすることができれば、その方が無理にパネル討論や招待講演を企画するよりも時間を有効に使えると思う。

すべての教官が何年かに1回は参加して、茨城大学の教育のあり方を討論できるようにすることが必要と思う。教官個々人の役割が大きいとしても、茨城大学の教育に責任をもつのは教育システムだからである。

掲 示 板 コ ー ナ ー

定 期 試 験

1. 教養科目後学期定期試験について

教養科目の後学期定期試験が、2月5日(月)～9日(金)に実施されます。定期試験の時間割は試験の1週間前に掲示されますので、各自確認の上、受験上の心得に則り学生証を持参し、受験してください。

なお、学生証紛失等により再発行を希望する場合は、学生センター証明書関係窓口申し出てください。

2. 後学期成績通知書の交付について

後学期に履修した教養科目の成績通知書は、4月初旬、各自の所属学部において交付されますので、所属学部の掲示板に注意してください。

3. 講義棟内の携帯電話の使用について

講義棟内や公共の場では、携帯電話の電源を切っておくか、マナーモードに設定しておくようにしてください。

教養教育(大学教育研究開発センター)のホームページについて

先に、当センターのホームページの開設により、学内掲示板にてホームページのアドレスをお知らせいたしましたが、この度「茨城大学のホームページ」でリンクすることが出来るようになりましたのでお知らせします。

現在のところ、総合科目のシラバスのみ掲載されていますが、今後、「授業に変更」、「休講」などを掲載していくようになります。

<http://www-crdue.admb.ibaraki.ac.jp/>

つ ぶ や き

新世紀の幕開けに際し、学生諸君の大学教養人としてのますますの学の発展を希望するところであります。大学としては、早急に新世紀に向けた大学改革を実施し、現在の多様性に対応できる理想(現在の大学のありかたが理想とかけ離れているかどうかはわからないが)の大学を構築することだと聞かされている。絵に描いた餅とならなければ幸いである。茨城大学は3キャンパスにわかれその不便さを指摘されてきた。たしかに経費的、教育的に不便である。しかし、便利ならば、何も生まれてこない事が、不便であるため生まれてくるアイデアもある。IT, ITとどこかの首相がたまわっているが、最近の動向をみるとブロードバンドを用いた教育の記事を新聞紙上で見ることも

ある。これなどは、わが、茨城大学にとって格好の道具であるかもしれない。ITになじみのない先生方は肌のふれあい大切だと主張される。これは、時代遅れの発想かもしれない。大学教育とは何か?広いキャンパスと学部が一点集中であることなど、ハード面の充実が大学の在り方か?決してそうとは思えない。それでは、何が大学教育で大切かとなるとはたと首をひねる人が多い。この大切なもの、それは人材である。その人材を引き回す人物の存在が一番大切である。いかに人材が豊富であるか、いかに傑出した人物がいるかが大学の将来をきめる。教育もこれと同じ。良い人材、良い人物を作り上げる教育が良い教育と言うことになるが、いかがでしょうか? Y. A

発行日 平成13年1月

発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター
水戸市文京2-1-1

029(228)8416(学生課教養教育係)